

べくも覺えず候。貴下願はくは此の邊愚考の紛糾せるを精査せられたく候。且や牢獄を開きて彩華目もあやなる宮廷に王女を送ること、果して當を得たりや否や、是亦賢裁を仰ぎたく候。實にも斯かるは淺膚極まる所見にて、然る果敢なき事件を過大視するは、思慮ある作者の採らざる所なることは、愚生とても固より心得居り申し候。何にも致せ、面白からぬ廉は、努めて削除するこそ、此の際の急務にて候へば、縦令拙きオペラの間曲なりとも、理性が許すほどまでの訂正は、是非に必要なるべく候。

愚生は一に貴下並びにバロオ Ballard 氏に信託申し上げ候ふ上、わが感謝をささぐる時の、一日も速かに來らむことを期待し申し候。……

一七四五年第十二月十五日

實に鄭重な手紙ではあるが、其の後同じ人から私へ寄越した手紙が、いづれも亂暴であつたのから見ると、別に驚くほどの事でもない。彼は私をばリシウッウ氏の大の信任者と思つたものと見える。そこで、誰も知る彼が持前の追従輕薄は、こ

の新來者に向つて、過度の尊敬を拂ふやうになつたのであらうが、しかし其の信任の度合が解つて了つた日には、決して何時までも其の態度である氣づかひはないのである。

ヴォルテエルの認諾を得て、意地悪のラモオに對する氣兼ねも要らなくなつた。早速爲事にかかつて、二箇月間で爲上げて了つた。歌詞の方は、ごく置か手を入れただけで濟んだ。作者が變つたために、文致の畫一を破るやうな事のないやうにと心配したが、結局その希望が徒でなかつたやうに思つて、得意であつた。けれども、曲譜の方は然う手輕には濟まされなかつた。種種な準備曲、殊に序樂を作製することは勿論、私の負擔した宣敎調はいづれも至難な事業であつた。短い詩句の間で、非常に急速な移調を使つて、調子の非常に飛び離れた合奏、合唱を幾つも結び合はさねばならぬからであつた。どうして然う苦んだであらうか。折角の作曲を私の手で滅裂にしたと言つて、ラモオに惡まれ口を利かせないやうに、孰の部分にも甚だしい變更や移調を加へまいとしたからであつた。出來上りの成績は見事であつた。この宣敎調の強聲も、勢力も、別しては轉調も殊に完全に行つた。ヴォル

テエルと言ひ、ラモオと言ひ、どちらもすぐれた作家であるから、此の人達と合作したのは、畢竟私の才を發揮させる譯になつた。考へて見ると、勘定にも合はず、名譽も伴はず、世間に認められることすら出来ないやうな爲事ではあつたが、私はこれが、ために、自分の手腕の、我がモデルとした其の人達に比べて、甚だしい等差がないものであるといふことを自覺した。

曲は私の修正した儘で、大オペラ座で練習されることになつた。作者が三人あつた中で、今其處に居合はせたのは、私ばかりであつた。ヴォルテエルは不在、ラモオは多分態と避けて來なかつたらしい。

第一獨白は哀愁を極めたもので、其の初句は斯うであつた。

O mort! viens terminer les malheurs de ma vie!

死よ、速かにわが生の苦を止めよ。

曲譜もそれに相應しいのが必要であつた。ところが、ラポブリニエエル夫人は、これを嘲罵の種にして、葬送の曲などと、厭味たつぷりな攻撃を向けた。リシッリッウ氏はこの獨白の詩句が、果して誰の手に成つたものかを、細かく調べ出した。

私は彼から受け取つた原稿を送り返した。するとそれはヴォルテエルののであつたといふことが判つた。

「それぢやヴォルテエルだけが攻撃されて可い譯ぢやないか。」

とリシッリッウ氏が言つた。練習の間も、私の手に成つた部分といふと、必とラポブリニエエル夫人には貶されて、リシッリッウ氏には讃められた。が終には困つた反對を受けるやうになつて、ところどころラモオと相談して、更に二度目の修正を加へなければならぬと言ひ渡された。賞讃を博することは私の豫期した所であり、當然の事でもあつたのに、反つてこんな結果に終つたのを見て、私は心に死ぬばかりの痛手を負はされた。その儘一室に閉ぢ籠つた。疲れと惱みに病氣を誘ひ出して、六週間は一步も外へ出られないやうになつた。

ラポブリニエエル夫人から修正の依頼を受けたラモオは、今度の私の序樂のかはりに使ふ積りて、先に私の作つた大オペラの序樂を所望して來た。それをば私に足柄を懸ける奸策と看破つたから、私はきつぱり斷つてやつた。いよいよ開演といふまでには漸と五日か六日しかなかつたから、ラモオもそれ迄に新しい序樂

1745(34)-1747(36)

を作る餘裕のある道理はない。だから爲方がないから、私のを其のままに据ゑ置くことにした。此の曲は伊太利亞のそれに倣つて出来たもので、當時の佛蘭西に在つては、全く目新しい型と言つてよかつたのである。でも幸ひと喝采を博して好劇家連は満足の意を表し、一般の聴衆はラモオが作つたものにして、了つたといふことを、大膳職のザルマレト Valmaletto 氏から聞いた。この人は私の親戚なり友人であるミッサアル氏の婿であつた。それにラモオは、夫人と腹を合せて、この作の中に、私の手が這入つてゐるといふことすら、他に知らせまいと謀つた。聴衆に配附する番附には、關係作家の氏名を悉く列記すべきであるのに、今度のに限つて名の出でゐるのは、ザルマレト一人だけであつた。これはラモオが、自分の名を出せば私のも出さねばならぬところから、畢竟自分のも犠牲にして私と交綏にして、了つた譯である。

病氣が痊ると直、リシッウ氏へ伺候しようと思つたが、もう遅かつた。彼は丁度ダンケルク Dunkerque へ出發して了つた。それは蘇格蘭の上陸軍を指揮するためであつた。公爵が歸國してからも、自分の疎懶の口實に、既う時が遅れて了つ

1745(34)-1747(36)

た、と獨言を言つた。其からは、再び此の公爵に遇ふ機會がなかつたので、著作に相當する名譽も、報酬も失つて了つた。而已ならず、時間、勞力、苦悶、疾病、それと、それに費つた金、然ういふものは一切自分の持ち出しに成つて、一スウの利益は、あるか、賠償すら得られなかつた。それにも關らず、リシッウ氏は、何となく味方になつて、自分の才能に好意を持つてゐてくれる人とは、かり思はれた。が、私の不運と、一つにはラ・ポブリニエ夫人の惡意とが、公爵の好意を徒にして、了つた。

夫人には、私も疎漏なく、機嫌とりどりに、随分取り入る工夫はしてゐたのであるが、奈何いふ譯で、其程に私を嫌つたのか、合點が行かなかつた。ゴオフクウルが私へ説明したところでは、斯ういふことであつた。

第一にラモオといふ者が、夫人に氣に入られて、もうその表向きの歸依者になつちまつてるんだから、競争者が出て來ては大へんだと思ふにちがひない。もう一つには、根本的に君が夫人から嫉視される理由がある。…君がジ・ネエツ人だといふことがそれだ。

是に就いて彼が話すに、ジ・ネエツの人で、ユ・ヘ・メル Imbert 師といふラ・ポブリニエ

エル氏の親友が、夫人の性行を知り抜いてゐたから、ラ・ポブリニエール氏が此の女と結婚しようとするのを、力限り禁めようとした。それが爲に結婚して了つた後、師に對する怨恨が骨身に沁みて、その餘波がジ・ネエツ人と見ると誰彼無しに祟のるであるといふ。

「主人の方は君に好意を持つてゐることは確かだが、それでもまだ彼の細君に恍惚ける間は油断し給ふな。夫人は君を憎む餘り、悪意でもつて甚麼仇をするか知れやしない。何しろ物騒千萬な家さ。」

と彼は附け加へたが、彼の言葉はすべて至當らしい。

其の同じゴオフクウルが、丁度この時分、私の求めてゐた救助に、少からず力を貸して呉れた。此の時私の尊むべき父は、六十歳を一期として歿つた。しかし自分の境遇の苦みに注意を奪はれてゐた私は、他の時よりも一層その哀傷を感ずることは薄かつた。父の存生中には、その手許に遺留された母の財産に就いて、曾て請求がましいことを申し出なかつた。その利息までが、皆父の所得に歸してゐた。が父の歿後は、もう遠慮するにも及ばないことになつた。しかし、實兄が死んだと

いふ正式の證據が出ないから、訴訟に困難を來たしたのを、ゴオフクウルが引き受けて、ロルト・Yolme 辯護士の巧妙な辯護振りに依頼して、好い鹽梅に事が落着した。僅かながら遺産が欲しくもあり、事件の経過が氣繁りて堪らなかつたから、判決の下るを待ち兼ねて居た。或る晩、自分の室へ歸つて見ると、手紙が一通來てゐるから、是だなどと思つて、胸の轟きに持つ手をもうち顛はせながら封を開かうとしたが、自分ながら餘り淺間しいやうな氣がして、

「何だまあ！」と自ら嘲けるやうな調子で、利害の念や、好奇心ぐらゐで、此のジャン・ジャンクがそんなに取り亂すとは何事だ！」

自分と己を窘めながら、手紙はそのまゝ燧爐の上に載せた。

其から著物を著替へて、徐かに横になつたと思つたら、もう前後夢中であつた。翌くる朝は、ぐつすり寝込んで了つて、手紙の事はもう覚えてもゐなかつた。寢床を出て著物を著ようする途端に、偶と手紙が眼に附いて、悠悠追らぬといふ風で封を押切つて見ると、中から手形が一枚出て來た。同時に私は一種の愉快を感じた。がその快感の中心となつてゐたものは、確かに、自主の心を失はなかつたといふ意

識であつた。生涯の中に、此の類の話は、十や二十はあつたけれど、茲て一一それを言つてゐる暇がない。金の一部は哀むべき母の手許に送り届けたが、同時に私は涙に眼を濡ませて、昔の幸福な境涯で續いてゐれば、此の金は其の儘そつくり、母の前に投げ出す筈のものだに、と思つて遣る方もない悔恨に閉ぢられた。母から来る手紙は、何時讀んで見ても、悲境に陥りつつあることを暗示せぬ事はなかつた。種々な祕法、祕訣、それを私へ書いて寄越しては、それでもつて相互の資産を殖やすことが出来るものと考へてゐたらしい。可憐しい境涯に居る彼女の感情は、彼女を淺見に、そして、狭量なものにしてつた。這箇から送つた僅かな金も、すべて彼女に喰ひ入つてゐる悪い蟲どもの餌にされて、彼女自身の滋養には何もなるものがなかつた。斯ういふ状態だから、私とても自分の必要物を割いてまで、那樣餓鬼どもに與れてやる氣はしなかつた。殊に後にも話すが、那樣奴等から彼女を極ひ出さうとして、甚麼に骨を折つても、みんな無駄になつて了つてからは、一層氣拙くなつた。

時が經つに隨つて金も缺乏して來た。吾儕は今二人で居る……いや四人だ。

もつと細かく言へば、私の家族は七八人もあると見てよい。その譯は、愚うて——まづテレエズといふ女は、稀らしい無慾な人間であるが、その母は、然うは行かない。世話をしてやつて些とばかり工面が良くなり出すと、その旨い汁の分け前を吸はせる氣で、彼處からも此處からも、ありと有る一家親族を、殘らず呼び寄せた。姉妹だ、姉だ、娘だ、孫娘だ、などと、言つて、諸方から集つて來た者が夥しい。來なかつたのは、アンジ H Augers の馬車監督官へ嫁に適つた姉妹一人だけであつた。テレエズの爲にと思つてして遣る事は、皆その母の手で、然ういふ餓鬼どもの餌に使はれて了つた。私は強慾な女に關係はない。又飛び離れた非望に動かされもしなかつたから、無茶を爲出來すこともなかつた。贅澤に流れず、一通りのこととして、テレエズを養つて、無理な強請を避けて行けばよいのだから、彼女が手爲事て儲ける錢は、悉皆母親に貢ぐことは、私も異議を唱へなかつたのみならず、尙だそれ以上のものさへ出して遣つた。しかし、運命は何處まで私を翻弄する氣か、母は母で取捨きの悪黨共の餌となり、テレエズはテレエズで、一家親族の餌にされて、中に介まつた私は、肝腎の當人の爲にと思つてしてゐる事が、孰方へも届かないやうな境遇に立つた。

思つて見れば不思議な譯だ。一番末の娘で、しかも此の娘だけが親から嫁入の仕度として貰へなかつたものが、あべこべに一人して兩親を養つて行くさへあるのに、兄弟姉妹、姪などまで散散窮められた揚句の果ては、現在彼等の虐げを拒ぐ由もなく、裸に引つ剃られる程の有様になつた。多勢の姪の中にゴトン・ルデック Goton Leduc といふ娘があつた。これも傍が傍だから、見様見真似に可なり措れてはゐたが、まだしも可愛くて性質の善良なのは、この子一人ぐらゐのものであつた。時々然ういふ娘等と顔を合すことがあつた。其の度に自分の命けた名前で皆を呼んでゐると、いつかそれが、皆の通り名になつた。姪を私が「姪さん *ma nièce*」と呼び、その伯母に當るテレエズのことを「小母さん *ma tante*」と呼ぶと、二女とも私を「小父さん」と言つた。私が始終テレエズを呼ぶに、小母さんといふ名前を用ひるやうになつたのは、此の時からだ。それをまた私の友人たちが調戲半分に「小母さん小母さん」と呼び立てたものであつた。

斯ういふ位置に立つた私は、此處から脱れ出ようとしても、足掻きのつかぬことは言はずと知れてゐる。リシッウ氏には既う忘れられたであらうし、宮廷の方は

絶望と獨りて決めて、それから巴里でオペラの興行を思ひ立つた。けれども、種種の困難な事情があつて、一朝一夕には行かない。私は日に増し窮境へ陥つて行く。其處で思ひついて「ナルシス」の喜劇を伊太利亞座へ採用してもらつて、自由に劇場へ出入することが出来たので、大得意だつたが、唯それだけの話だ。その劇が舞臺に懸けられるのでもなし、俳優の機嫌ばかり取つてゐるのが堪らなく苦しくなつて、その方も廢して了つた。唯一つどうしても試してみなければならぬ筈の、最後の手段に懇へることに決心した。

ラ・ポプリニエール氏の邸へ出入りをするやうになつてからは、デッパン氏の方は自然疎々しくなつてゐた。兩家の夫人は血縁の間でありながら、仲が悪くて全て顔も合はさなかつた。兩家の交りも随つて冷かなもので、唯「チエリオオ Thieriot」だけが交るゝ、兩家の間を往つたり來たりしてゐた。私をもう一度デッパン氏の家へ伴れ込む考が彼にあつた。フランキウ氏は、當時博物や化學を研究して標本を蒐めてゐた。多分アカデミーの科學部員になる野心でもあつたに違ひない。その論文を書くについて、私を助手にても使はうといふ氣があつたらしい。デッパ

1745(34)-1747(36)

ン夫人は亦別に腹案中の或る著作を書き始める積りて、これも同じ様な考を持つてゐた。そこで二人の間へ共通の書記に私を備ひ入れるために、チエリオオが笛の旗色を覗ひに來たのであつた。私は豫めフランキウ氏が、ジュリョットと合同してオペラ座で私の作を試演させることを條件にしてその同意を得た譯者云。Pierre Jelyotteは當時巴里著名のオペラウタひ。オペラ座に據つて、ラモオや、モンドンツィ、Mondonville等の曲中のシテを演じた。一七八二年歿。粹詩神は最初幾度も小芝居で練習され、次いで大劇場でも演ぜられた。大練習の時は、聴衆が満場て處で喝采を博した。にも拘はらずその演奏中に、指揮者たるルベル Rebelも拙かつたからでもあらうが、自分では此の曲は到底受けることは難しからう、大修正でも加へなければ其の儘で蓋を開けるのは無理だと知つた。て、何とも言はずに、其曲を引つ込めて、危く鈍痴を喰ふところを通れた。縦し曲は完全でもそれを受けさせることは難しいといふことを、種々な事情から私は明かに看破つてゐた。フランキウ氏は、私の作を試演させることは約束したが、それを受けさせるといふことは約束外であつた。彼は堅くその口約を守つた。此の場合に限らない、何時

1747(36)-1749(38)

でも私は斯ういふことを氣取つてゐた。——彼と言ひ、ヂッパン夫人と言ひ、孰れも私の世の中に名聲を博することを好まなかつた。その譯は、若し私の名が揚がれば、彼等の著作が世に出た時に、私といふ支障者が隠れて居るからだ、他から想はれる憂があつたからである。けれども、夫人は私を凡庸の人物としか観てゐない。て、私を使ふと言つたところ、ほんの原稿の整理、か引證の穿鑿ぐらゐの事にしか過ぎぬのであるから、然ういふ非難は、少くも、夫人に取つては當つてゐなかつたかも知れぬ。

一七四七—一七四九。——此の最後の失敗は、私を絶望の淵に突き落して了つた。向上の事業、名譽の計畫、それをすべて打棄てさせた。自分の利益にはならぬやうな技倆は、自惚なら言ふ迄もなく、まことそれがあるにしても、それを恃みにする事はぶつとり廢めにした。只管自分の生活とテレエズの生活を楽しくする事に、時間と注意を向けた。また斯うした方が、然ういふ事ばかり考へてゐる人達にも悦

ばれる途であつた。第一に私は、全然デッパン夫人と、フランキウ氏とに跟ききりになつた。これがために奢靡な生計は出来なかつた。最初二年間は、一年に八百乃至九百フラン(約計三百乃至三百五十圓)貰つて、其金で其の人達の近所に住む必要上、巴里の目抜といふ町で裝飾附の室を借り、同時に同じ巴里の片邊りの降つても照つても毎晩極まつて、てくてく夕飯を喰ひに行くことにしてゐたサン・ジヤック町の突端にも家を借りてゐなければならぬ始末であつた(六〇四頁)。これで衣食に事を缺かないやうにとは、大抵のこととなかつた。其の中に爲事の手加減も解り、興味も出て来るやうになつた。みつちり化學の研究に身を入れた。時時ルウエルの處へ、フランキウ氏と一緒に講義も聴きに行つた。そして未だ眞箇の智識も蓄へぬ中から、二人で無暗と此の科學に關する記述を始めた。

一七四七年、私達はツウレヌ Tournaine のシノンソオ城で、その歳の秋を過ごすために出掛けて行つた。此の城はシエール Cher 河に臨んだ離宮で、顯理二世がデアヌ

ド・ポアチエ Diane de Poitiers のために建てたもので、今でもデアヌの名前の頭字が其處に残つてゐて、當時は收税請負人のヂャパン氏の所有になつてゐた(譯者云)。ツウレヌは中世に於ける佛蘭西の一名で、其の境域は現時のアンドル・エ・ロアアル Indre et Loire 縣と同一である。ロアアル河諸支流の相會する地方に當り、佛蘭西の花苑といふ美稱を得た。其の支流の一つなるシエール河中に、ルネッサンス Renaissance 式の一偉觀 Chateau de Chenoueaux が立つてゐる。アネト Anet 城やチャイルソイ Tuileries 宮の造營に知られた當代王室の大建築家フィリベール・ド・ロルム Philibert Delorme の手で潤飾されたものである。フランソア François 一世王の時離宮となり、顯理二世王はこれをデアヌ・ド・ポアチエに與へた。第十八世紀には王室の手を離れて私人の有となり、當時の名家モンテスキウ、ヴォルテール、フォントネル、ピッコン、ボリンブルック Bolingbroke 等が皆此處を慕つて遊びに行つた。ルソオも其の一人であつた。此の城は革命時代の敗壞を免れて、今も尙舊觀を存してゐる。デアヌ・ド・ポアチエは十三歳で始めて結婚して、後にヴァランチノア Valentinia 侯爵夫人となり、夫に死別れて四十歳位の時、當時十八歳の太子であつた顯理二世王の思はれ人となつ



第七卷  
た。顯理二世王にはカトリイヌ・デ・メヂチ Catherine de' Medici といふ王后があつたけれど、二女の關係は圓滑で、王の在位中は、デアヌが主權を振つてゐた。吾儕はこの美しい土地で、面白く楽しく日を送つた。私は身體が肥つて修道僧のやうに見えた。此處ではまた、音楽が餘程逸んだ。和聲を加へた種種な三部合唱曲を試作した。これに就いては、若し他日機會があつたら、本書の補遺の部で詳しく話すことにしよう。素人芝居なども催された。私は二週間ばかりかかつて、無謀なる約婚 'l'Engagement téméraire' と題する三幕物を作り上げたが、唯賑かだといふ外には、何の取柄もないものであつた。これは私の文集の中に這入つてゐるであらう。ただその外にも、いろいろ書いたものがあつた中に、シエルの河の堤防に沿うた遊園地内の並木道の名を取つて「シルヴァの細徑 'l'Allée de Sylve」といふ詩を試みた。斯ういふ事をしてゐる一方、化學の研究や、デッパン夫人の手助けも、決して怠らずに續けて行つた。

シノンオで私が肥つてゐた間に、巴里では亦、テレエズの身體が、別の意味で服れて來た。歸つて見ると、豫ねておぼえのある事ではあつたけれど、慙う速く完成にならうとは意ひがけなかつた。今の境遇では是こそ實に私を窮地に陥れるものであつたが、幸ひに食卓の會友達の救助で、胸を撫て下す事が出來た。この事は簡單には話されない重要な物語の一つである。動ともすれば事實を曖昧にして、自分の言ひ開きをするか、又は罪を被つて了ふといふやうな傾きになり易いからである。此處では那樣考へは少しもない。  
未だ彼のアルツナが巴里に滞在してゐた頃、私達は飲食店へ食事をしに行くかはりに、丁度近所のオペラ座の袋町と向ひ合せになる、或る仕立屋の内儀の、ラ・セル La Salle といふ人の處へ食事をしに行つた。食物は粗末であつたが、此處に集まるのは、いづれも善良な健全な人達ばかりで、たとへば見ず知らずの者がこの仲間入りをしたければ、必と會友の誰かの紹介が要る程であつた。で、どうしても此處へ來勝ちになつた。グラヴィル Gravelle といふ帶動者は、禮儀の正しい、機智に長けた老人であつたが、通人て話とはかく猥褻に流れた。此の人が此の家に泊つ

1747(36)-1749(38)

てゐて、親兵や銃兵の若い放縦な士官たちを引き入れた。ノナン Tonant といふ帶動者は、オペラ座の歌女には残らず馴染があつて、毎日のやうにこの魔窟の消息を齎らした。謹直で分別のある退職陸軍中佐デブレイ、シイ Duplessis と云ふ老人と、銃兵の士官アンスレエ Ancelot 氏とが、それらの若い人達の間立つて、幾分の規律を支へてゐた原注。私一家の作風を見せた「捕虜 Les Prisonniers de guerre」と題する短い喜劇を興へたのは、此のアンスレエ氏であつた。これは佛蘭西人が、バイエルン Bayern や、ボヘメン Böhmen での災難を材として構想したものである。ところが此の作では、佛蘭西王をも、佛蘭西をも、佛蘭西人をも、私の心に思つてゐる通り、餘り良くは言つてゐないといふ理由から、其を公演させようとはしなかつた。今一つには、表面上私は共和論者なり、フロンド黨員といふ譯になつてゐるけれど、自分の政見と正反な國民の味方とは宣言することが出来なかつたからでもある。佛蘭西の不幸に就いては、肝腎の佛蘭西人自身よりも、一倍苦に病んだ私は、自分の國家に對する誠意を、他人の僻目から、阿諛だ卑劣だと思はれるやうなことがありはせぬかと心配をしたのである。私が佛蘭西の國家に好意を有つやうになつたは何時

1747(36)-1749(38)

奈何して初まつたかといふことは、既に前に話したことであるが、それを公表することを私は恥ぢてゐたのである。其の外商人や、銀行家や、請負師のやうな人々で集まつて來たが、何れも眞面目で、几帳面で、同業者の中でも良い顔の方であつた。ペッセ Pesse 氏に、フォルカアド Forcade 氏、その外の名前は忘れた。とにかくあらゆる種類の社交的人物が此の一堂に會した。除外になつたのは、宗敎家と法律家ばかりだ。然ういふ人には一度も出會したことがなかつた。それを仲間に入れまいといふ申し合せにもなつてゐた。多勢集まる食卓も、快活で喧噪に互らさず、放縦で蠻俗に墮ちなかつた。老帶動者は實質の脂肪濃い話ばかりをしてゐたけれど、其のかみの宮中の禮法は失はず、女に聽かして顔を赧くさせるやうな嬌らしい言葉などは、口にしなかつた。此の人の態度は、全體の模範として可いものであつた。若い人達は誰も皆自由に、そして遠慮なく、銘々意氣筋の物語を語り合つた。それにぢき傍に女の問屋があつたので、女の話に事を缺くことはなかつた。——といふ譯は、セエルの家へ行く小路に、當時老舗の婦人帽を賣るデュシヤ Duchast の店があつて、其處には標緻のよい娘を幾人も置いてあつたから、會友たちは食事の前

に、その店へ遊びに行くことになつてゐた。私ももう少し大膽であつたら、外の人達と同じやうな楽しみが出来たかも知れぬ。唯一緒に其處へ這入つて行くといふことが私にはなかなか出来なかつた。

アルツウナが居なくなつてからも、此のセエルの家へは始終出かけて行つて食事をした。行く度毎に味の深い逸話を澤山聴きおぼえた。そして此の邊で流行る——道德でない——教訓を學ぶことが出来たのは幸福であつた。謹嚴な人の逆境に排擠された例、人の夫の欺かれた例、人の妻の誘惑された例、違法の出産の例、然ういふ事が一番多く持出された話題で、殊に育兒院へ子供を一人でも餘計入れるやうな人が一番褒め者になつてゐた。この話にはつい釣り込まれた。温良な誠實な人達の間にも、此の風が一般に行はれるのかと思つて、自分の考へ方を定めた。「これが此の國の習慣である以上はその國內に住む者は、それに従つて可い譯だ。」憊う私は獨語を言つた。かの思案に餘つた善後策が、これに漸く見つかつた譯になる。遽かに私は元氣附いて、些しの猶豫もなく、然うすることに決めて了つた。殘る懸念は唯テレエズの思はく一つとなつた。彼女の名譽を救ふにも、是に優る

1747(36)-1749(38)

1747(36)-1749(38)

手段はないといふ事を話して、得心させる迄には、容易な骨折てなかつた。母親も子供が殖えるのを煩さがつて、私と同じ考を持つやうになつたので、彼女も澁澁折れて來た。産婆に雇つたのはサンツウスタアシ、Saint-Eustacheの角に住んでゐた、グアン Gonin といふ處女で、ごく確かな、几帳面な人であつた。いよいよ臨月となると、テレエズは母親に伴れられて、グアンの家へ預けられて了つた。私は幾度も見舞ひにその家へ行つた。その時二枚の札へ花押を書いて彼女に渡した。その一枚は嬰兒の著物へ縫ひ込まれた。この花押は、制規どほり、産婆の手から育兒院の事務所へ差し出された。

翌くる年も同じ出来事があつたので、やはり同じ手續をしたが、この時は花押のことだけ忘れて了つた。今度は私も思ひ悩むことはあまりなかつた。母親の同意も求めずにした。が、テレエズばかりは可憐しく嘆いた。此の絶體絶命の行爲から、此の後私の思考の上にも、運命の上にも、さまざまな變遷の起る順序は、追ひあひ明かになつて行くであらう。爰ては、端緒を話すだけにとどめて置く。薄氣味の悪い、そして殘酷な後日譚が出て來る場合に、此の時の事實が必と屢々參考の



人夫エネビエ

第七卷  
引き合ひに出るにちがひない。

茲でエビネエ夫人と相識になつた謂はれを話さう。此の夫人の名前は書物の中に幾度となく出る。夫人の初めの名はエスクラヴェル Esclavelles 嬢と言つたが、收税請負人であつたラライッド・メルガルド Lalive de Bellegarde 氏の息子、エビネエ氏に嫁いた。所天はフランキエウ氏の様な音楽家であつた。夫人も同様音楽家で、此の三人の趣味が同じ所から互ひの交情は親密であつた。私はフランキエウ氏に伴れられて、その夫人の家へ行つたのが發端で、それからは折折夫人と食卓を同一にすることがあつた。氣爽で、伶俐で、非凡な才能のある女、知己としては、確かに敬ふべき人であつた。ところが評判のよくないデット D'Elle といふ女が、夫人の友達にあつた。その女は、是も評判の餘り、薫しからぬ士爵のヴォロイ Valory といふ人と同棲してゐた。エビネエ夫人の氣質として、擇り好み、好みが、聴しく、その上性質に卓れた所があつて、常徑を踐み誤るやうな事はない筈であるのに、然う言ふ二

人の男女と懇意になつたことは、確かに不覺であつた。

フランキウ氏は私に注いだ友誼の一部分を、彼女にも注いだ。夫人との關係が親密であることは、彼自身の口から残りなく聞いた。此の理由があるから、その關係が世間に弘まつて、主人エビネ氏の耳にも這入るまでは、姑く私も話さず置きかうと思ふ。フランキウ氏は、夫人について一種奇怪な事を、秘密に話したことがある。けれども、彼女自身は、決して私に言ふ筈もなければ、然ういふことまで私が聽いて知つてゐようとは、夢にも氣づかなかつた譯者云。或る説に據れば、夫人の所天エビネに一種の病氣があつて、それに夫人が感染し、それがまたフランキウにも感染したのだといふ。それもその筈で、私はこの事を彼女はるか、生涯誰にも聽かせまいと決心してゐたからである。此の秘密談を聽かされてから、原被雙方に對して、私は何とも言へぬ切ない位置に立たされた。殊にフランキウ氏の妻は、良人の情婦たるエビネ夫人と私が、心安くしてゐるにも拘らず、決して私に疑心を持つやうな人てなかつたから、それが爲、氣の毒さが一層であつた。私は出來得るかぎり、この哀むべき婦人を慰めるやうにしてゐたのに、肝腎の夫

ランキウイユ氏は、妻の愛情をば、極めて冷かな眼で看過してゐた。この三人の言ふ事を、別別に聽いて廻つてゐる私は、十分慎重に、互ひの間の秘密を守つてゐたから、三人の中の誰もが、他の二人の秘密を私から手繰り出すやうなことはなかつた。然うかと言つて、兩方の夫人と懇意にしてゐることを、他の一人の夫人に匿し立てすることもなかつた。フランキウイユ夫人は、種種の事で私を自分の手下に使はうとしたけれど、それはきつぱり断つた。エビネエ夫人も、一度など、フランキウイユ氏に宛てた手紙の取次を頼んだから、私はそれも断つて了つた。それに附け加へて、今一度那樣事を頼むやうなら、もう永久此の家へ寄り付きもすまいと、自分の直情から然う言ひ切つた。エビネエ夫人に對する義務として、言つて置かねばならぬ事がある。それは、然う言つた風な私の舉動が、彼女に不快を與へたかと言ふに、然うては、彼女がフランキウイユ氏に其の事を話すにも、甚く私を讃め立てて、私の待遇上に何等の悪い影響をも喚び起こさなかつたといふことである。以上三人の人達とは、私は疎略に出来ぬ間柄で、幾分かづつは私も恩を受けて居たのに、其の三人の間では互ひに睨めつことをして、中に介まつた私は、随分と氣草臥がした。

けれども、努めて穩かに氣を悪くさせぬやうと思つて、出来るだけは硬直一遍で押し通した。であるから、何時までも三人の友誼と尊敬と信用を失ふやうなことはなかつた。譯のわからぬ不作法な私のやうな人間でも、エビネエ夫人は自分達の交友の中に加へて、ベルガルド氏の所有なる、サン・ドニイ Saint-Denis 附近のラ・シ・ヴレット La Chevrette の別荘へ伴れて行つてくれた。其處にはちやんと劇場まであつて、素人芝居などが時々催された。一度私は或る役を振られて、六箇月間も休まず稽古をしたのに、開演の當日となつてからも、徹頭徹尾黒衣が附かなくては、一語も白か言へなかつた。これに手を焼いて、二度目からはもう誰も舞臺に出ると勧める者はなかつた。

エビネエ夫人の眷顧を蒙るやうになつてからは、夫人の義妹で後にウドトオ伯爵夫人となつたベルガルド嬢とも相識になつた。初めて此の人に會つたのは、丁度翌日嫁入するといふ前晩であつた。けれども、持前の愛嬌に惹きつけられて、長時間の物語を續けたことであつた。その時私は、實に懐かしい人であると思へたばかりで、此の年若な女性のために後日私の運命が動かされて、縦し彼女に罪はな

かつたとしても、今現在私の沈淪してゐるやうな渦巻く淵の深みへ誘ひ込まれようとは、全く意ひも掛けなかつた譯者云。ウドトオ夫人は一七三〇年の生れてルソオより十八歳若かつた。夫ウドトオ伯爵はノルマン貴族で結婚當時夫人は十九歳であつた。

ヴェネチアから歸つて來て後は、デドロオのことや、友人のロガンのことには就いては何も話さなかつた。けれどもそれで二人を忘れてゐたのではない。殊にデドロオとは日日親密になつて行つた。私にテレエズといふ者があるやうに、デドロオにもナネット Nanette といふ一人の婦があつた。それが私たち二人の境遇の似通つた點であつた。ところが、私のテレエズは、容貌は勿論ナネットに劣らぬ上、氣質は温順で、品性が可憐であるから、一廉の男子でも吸ひ寄せる力はあつたが、ナネットに至つてはその正反對、實に野卑な娼婦と謂ふ外はなく、教育の缺陷を埋め合はす程の美點といふものが、全く見られなかつた。でも彼は此の女と結婚した。然

らういふ約束が有つたにしても、彼としては大出来であつた。私の方は、テレエズと然ういふ約束をしてゐないから、何も急いで彼の真似をするには當らなかつた。コンデヤク師とも交際を續けた。此の人も、當時は私同様文壇に何等の重きを爲す者でなかつたけれど、現今ののやうな高名を博すに至る素地は確かに在つた。彼の實力を洞察して、それに相當する尊敬を拂つたのは、恐らく私が最初の者であつたらうと思ふ。彼も亦私が好きならしかつた。私がオペラ座に近いジャン・サン・ドニイ Jean-Saint-Denis 町の一室に閉ぢ籠つて、「ヘシオドス」の幕を書いてゐた時分には、よく私の處へやつて來て、二人で釀金の晝飯を喰つたものである。其の頃彼は處女作として知識の起源 Essai sur l'origine des connoissances humaines を書いてゐた。それが脱稿すると、出版書肆を捜すのに大分困つてゐた。巴里の書店は、何處でも無名の文士の物は、なかなか引き請けようとしなない。殊に哲學物の殆んど流行しない當時では、それを背負ひ込むやうな酔興人はない。私がコンデヤクとその著作物の事を、デドロオに話したのが始めて、それから此の二人を紹介させた。素より二人は意氣の投合する素質で、すぐと互ひに手を握り合ふやうになつた。デド

1747(36)-1749(38)

ロオは例の原稿を書店のデュラン Durant へ押附けて了つた。大哲學家コンチャックはその處女作の報酬として百エキウ(約計二百圓)だけを而も好意から受け取ることが出来た。それも私の力で出来たことだ。吾々は孰れも市中で懸隔れた町に住んでゐたから、一週に一度つづ、バレエ・ロアヤアルで三人が會合して、其處からうち伴れてパニエ・フルウリイ Panier Henri 館へ晝飯を喰ひに行くことにした。その一週間毎の小會食は、ジドロオには此の上もない樂みてあつたに相違ない。その證據には、何處の集會にも大抵闊席勝ちのヂドロオが、此の會合だけは決して缺かしたことがなかつたのでも分かる。その間に私は提議して、「ベルシフルウル Le Persifleur (嘲罵者)といふ雑誌の發刊を企てて、ヂドロオと私が交代に筆を執ることにした。初號は私が書いた。それが縁になつてダランベエル D'Alembert とも相識になつた。これは雑誌のことをヂドロオから話したからで、其の後種種な事件が起こつて、雑誌の事もそれなり頓挫して了つた。

此の二人はその時「百科辭典 Dictionnaire encyclopédique」編纂の事を計畫してゐた。ヂドロオは前にジエムズ「醫學辭典」を完成したところであつたから、まづ其の位

1747(36)-1749(38)

の大きさを、チエムバアズを翻譯した程の物を拵へ上げようといふのが最初の方針であつた譯者云。「醫學辭典」の原名は、「Dictionnaire universel de médecine, de chimie, de botanique」と言つて、ロバート・ジエムズ Robert James の原書を、ヂドロオが三人の助手を使つて譯したもので、一七四八年に完成した。チエムバアズは即ちイイフライム・チエムバアズ Ephraim Chambers の編纂した「Cyclopaedia, an Universal Dictionary of Arts and Sciences」をさふ。一七二八年の初版で、英語で書いた百科辭典の嚆矢である。ヂドロオはこの事業に私をも加へる積りで、その中の音樂の部を書くやうに勸めて來た。寄稿の諸家に對しては、いづれも僅かに三箇月の日數しか與へなかつたので、私も承諾はしたけれど、大急ぎの執筆で、ごく拙いものしか書けなかつた。それでも期限までに脱稿した者は私だけであつた。原稿は彼に渡す前に、フランキエ氏の書生の、ヂボン Dupont といふ者に清書をさせたが、如何にも見事に出來上がったので、自分の衣兜から十エキウ(約計二十圓)出してやつた。しかしその金は私の手へ還る時がなかつた。ヂドロオは私に、書店の方から報酬をさせるといふ約束をしたけれど、その事に就いては、其の以後彼からも私からも、何とも言ひ出



す時がなかつた。

「百科辭典」の計畫も、デドロオが拘禁された爲に一時中止となつた。「哲學的思索 Pensees philosophiques, 1746」を書いた爲にも、一時彼は難儀に陥つたことがあつたけれど、それは別に後害を貽す程でもなかつた。しかし今度の「盲者へ Lettre sur les aveugles à l'usage de ceux qui voient, 1749」を出した時には、前の様な譯に行かなかつた。

この公開狀は別段非難する程のものではないが、唯その中に、デュプレド・サン・モオル Dupré de Saint-Maur 夫人と、レオオミ、ウル氏とに關して、幾分か個人的誹毀に亘る部分があつたために、其の二人から事が聳しくなり出して來て、到頭デドロオはヴァンサンヌ Vincennes の監獄へ拘禁されることになつた。親友の不遇を可傷しく感ずる心は、喩へやうもなかつた。何事をも做大に見る癖のある、因業な私の想像は戰慄した。デドロオの後半生は、其の牢獄の中で終結を告げるのであるまいかと思はれた。然う想ひ出すと、自分の氣が何うかなつて了ひさうであつた。私はボンバヅウル Pompadour 侯爵夫人に哀訴狀を出して、彼を釋放するか、自分をも一緒に拘禁するかして欲しいと言つてやつた譯者云。夫人は當時の國王、路易第十五世の

1747(36)-1749(38)

1747(36)-1749(38)

寵姫。内外の政務に干與したことは歴史に出てゐる。一七六四年歿。それに対する返事は來なかつた。這廋筋道の立たぬ哀願に、何の效驗があらう。だからその後幾日か經つて、この哀むべきデドロオは、幾分か緩かな取扱ひを受けるやうにはなつたけれど、私の手紙がそれに與かつて力があつたとは自惚にも思ひはしない。しかし、デドロオが若し何時までも同様の苛酷な取扱ひを受けてゐるやうであつたら、必と私は絶望して、いま／＼しい其の監獄の門前で、悶え死にに死んで了つたに違ひない。たとへ私の手紙に、幾らかの效驗があつたにしても、其の爲に誇る積りは少しもなかつた。現に私はこの事を誰にも話した覚えはない。デドロオにすら、聽かせたことはなかつた。

大正四年九月六日  
大正二年四月廿三日  
印發行  
發行  
再訂版  
發行

不許  
複製

著者 石川 戲庵

發行者 東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地  
大日本圖書株式會社

右代表者 專務取締役 宮川 保全

發行所

東京市京橋區銀座壹丁目二十二番地  
大日本圖書株式會社  
郵便振替口座東京二一九番

ルツォ機録與付  
定價 前篇 金壹圓五拾錢  
後篇 金壹圓五拾錢

349

374

終

